

- ・ 種子や床土の消毒を行いましょ。う。
- ・ 浸種・催芽・育苗は温度管理がポイントです！

栽培管理

優良種子の使用

良質米生産のため、採種は産の種子を乾燥籾で 3~3.5kg/10a 準備しましょう。また、種子伝染性病害の発生防止を徹底するため、消毒済種子を使用しましょう。未消毒種子は必ず種子消毒を行いましょ。う。

床土の消毒

苗立枯病の発生を防止するため、必ず予防剤を混合しましょ。う。

人工培土で消毒済と書かれていても、熱処理されているだけなので、必ず消毒をしましょ。う。

浸種

浸種は種籾を一斉に発芽させるために大切な作業です。適切な水温(10℃~15℃)を確保し2~3日ごとに水を替えながら、十分な期間行いましょ。う。

ワンポイント! 種籾の吸水程度を均一にするため上下を入れ替えましょ。う。

表 積算温度の目安

消毒種子の種類	積算温度
未消毒種子	100~120℃
消毒種子	120~130℃

(例) 水温 12℃×10 日 = 120℃
水温 10℃×13 日 = 130℃

種子の状態をよく見ながら行いましょ。う!!

⚠️浸種時の注意⚠️

- ・ 薬液消毒種子の場合は浸種してから最初の3日間は水を交換せず、その後は2~3日ごとに交換するようにしましょ。う。
- ・ 浸種水温が低いと発芽不良が助長されます。3月中旬~4月上旬は寒暖の差が大きく夜が冷えることが見込まれる場合は以下の措置をとって下さい。
 - ✓ 催芽機で温度をかけて浸種する。
 - ✓ 毛布などをかけて保温し水温が下がらないようにする。

催芽

催芽は芽長を揃えるために重要な作業です。水温は28℃～30℃に設定し、18～20時間で均一に催芽させましょう。細菌病等の多発が懸念されるため、温度は高くしすぎないようにしましょう。また、芽が出過ぎると芽がからんで播種がスムーズにできません。種子の状態をよく見ながら作業を行いましょう。



ハト胸状態の種籾

播種

播種量は、1箱あたり乾燥籾で150g以下（催芽籾では190g以下）で、均一に播種しましょう。また、以下の表を参考に適期播種をお願いします。

表 田植え時期ごとの播種時期

田植え時期	播種時期	育苗日数（稚苗）
5月上旬	4月上・中旬	22～25日
5月中旬	4月下旬	18～20日

育苗時の温度管理

苗の緑化・硬化時期（育苗初期）	昼間 25℃～18℃（30℃以上にしない） 夜間 10℃、最低 5℃以上
育苗中期 育苗後期	昼間 25℃～18℃（30℃以上にしない） 夜間 5～7℃以上

ハウスやトンネル内の温度計は苗の高さに設置し、苗付近の温度を確認するようにしましょう。

ワンポイント!

昼間は急速に温度が上がり、夕方は見た目よりも日差しが弱くなるため、8時にはハウスを開け、16時には閉めるようにしましょう。

かん水

緑化期：極度に乾燥した時以外はかん水を控え、初期の徒長を防ぎましょう。

硬化期：床土の乾き具合、苗の生育状況を見て、控えめにかん水しましょう。

かん水量が多すぎると苗が徒長して、根が生育不良となるので注意です。



4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

「自分だけは大丈夫」と思わないで、いつもの作業も安全確認を!